
マルボロメモリー

常煮一人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マルボロメモリー

【Nコード】

N1441D

【作者名】

常煮一人

【あらすじ】

駅近くの神社、学校の屋上、トイレ、部室……。そんな一室で学生たちはヤニくさい煙に癒されている。

（前書き）

少なからずあるでしょう。
スリルを感じたこと。

チャイムが静寂に包まれた校内で鳴り響く。それを合図に、筆箱にシャーペンを入れる音、椅子を引く音などで賑わう。その音がしばしの休憩時間の名物とも言える。

「ちょっと保健室行ってくるわ」
「おう」

近くの級友にそう告げた俺は具合悪そうな顔付きで教室を出ると、スイッチが入ったように階段を駆け登る。
目指すは屋上。俺は俺なりの休憩時間を過ごすぜ。

三段抜かして駆け登ると、佐倉が待っていた。
「おっせーよ」
「悪い悪い」

佐倉の文句をさらりと受け流すと、職員室で盗んだ屋上に入るための鍵を差し込み、錆ついたドアをこじ開けた。

「うえーい」
俺が歓喜なる声を上げる。ここはもう、俺らの秘密基地だ。

屋上内を走り回り寝転がる。

「すっげー」

空はとてつもなく広く、太陽が明るく照らす。紫外線が初冬で凍えた俺の体を温める。

「あんまりうるせーと先生来るぞ」

いつまでもクールな佐倉は、学ランの内ポケットに忍び込ませておいたマルボロの箱を俺に見せつける。

「うるさくしないから一本ください」

「たくつ、しょうがないわがままさんだな」

まるで馬鹿にしたような言動に力チンと来て、屋上の鍵を落とそうとした。

「やめてくだせえ、オイラの憩いの場が、憩いの場があ…」

俺はそうだな、と同意を求めながら一本もらい火を着けた。

「いやあ、授業中に溜め込み溜め込んだストレスが抜けるな」

まるで煙と共に吹き出すように、ストレスがスーッと抜ける。

訳わからない公式や文法に頭を悩ませる。わからないけど分かるうとしないからだと思うが、50分も静かにしなければならいなんて俺にとっては拷問だ。

「たくつ、なんで20歳まで吸っちゃいけないのかさ。こんなにいいのに」

「そうゆう制限がスリルを味わえるいい素材になれるじゃねえの」

「それがいい思い出になるよな」

「なあ、卒業文集に書きそうだ」

それはやめてくれ。

俺は心の中でそう願う中、佐倉はゆっくりと口から煙を吐く。

この煙も、ヤニ臭いこの匂いもいずれは消えるけど、こんなスリルを味わった思い出はいつまで経っても消えないだろうな。

授業開始の合図を知らせるチャイムが鳴った。屋上にメガホンの形をしたスピーカーがあるからうるさくて仕方がない。

「授業始まったぜ」

佐倉が火を床に押し付けて消しながら俺に知らせる。

「いいんだよ、俺保健室にいくって言っただし」

「偶然だな。俺もだ」

佐倉は笑顔でそう言いながら、俺にもう一本渡した。

そして時間が経ち、今日は卒業式となった。

「もうあそこには…」

俺は誰にも聞こえないように呟きながら屋上を見上げた。

そして俺は決意した。

「なあ佐倉」

「ん？」

「最後の思い出造り、いきますか」

「よしきた」

俺らは走りながら校舎へと向かう。担任に忘れ物をしたと念を押し、屋上へと向かう。

「早く早く」

「おう」

俺はポケットから屋上の鍵を取り出し、素早く穴に差し込む。
ガチャ、と鍵が開き、錆び付いた引き戸を引くと、そこには誰も
いなく、哀愁漂う屋上が見えた。

「ここも今日で最期か」

「なんか黄昏ちやうな」

ゆつくりと屋上の床を踏み締める。

スリッパ型の上履きから伝わる床の温度がやけに体全体に行き届く。

それは屋上がこれで最期の俺らに対しての、細やかなプレゼント
かもしれない。

「よし、早速」

ガチャ

ガラガラ

佐倉から一本をもらう所で錆び付いた引き戸が悲鳴を上げ開く。
担任か、同級生か。誰かわからない。

俺らは身を潜めながら、隠れる。

「うわぁ、初めて入った」

「まさか開くなんてな、屋上」

「誰かが開く音が聞こえてな。てか誰が開けたんだろう」

この声は、俺らにひつついていた一学年下の後輩だ。

後輩たちは屋上内を観察している。

出るか？

佐倉がコクリと頷く。

「クオラー！！何をしてるんだ！？」

ビクツと後輩が震え、周囲を確認する。だがすぐに俺らを見つけて、安堵の表情を浮かべた。

「なんだー、先輩たちか」

「開けたの先輩たちですか？」

「ああ、拾ったんだ」

「すごいっすね」

後輩が尊敬するまなざしで俺らを見ている。

そうか、こいつらなら…。

「おい」

後輩が振り向く。

「これやるよ」

俺は後輩目掛けて鍵を放り投げた。

鍵は綺麗な弧を描き、太陽の反射で何回か光りながら、後輩にキヤツチされる。

「これ鍵っすか？」

「ああ、次期屋上主はおまえらだ」

「俺らの箱入り娘だ。可愛がってくれよ」

「はい！ありがとうございます」

後輩は深く一礼する。

「じゃ、吸いますか」

佐倉は笑顔でマルボロの箱を取り出した。

俺らのスリルもこいつらが引き継ぐことになるだろう。

もしかしたら、こいつらが落ちてたと言って鍵を渡すかもしれない。
また知らない後輩に託すかもしれない。

だけど、このスリルとヤニくさい匂いはここに残っている。

ずっと、ずっと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1441d/>

マルボロメモリー

2010年11月27日19時10分発行